仙台司教区 教区事務所だより

（第　45　号）
昭和56年7月1日

カトリック学校・幼稚園は、宣教の主役
教区あげての協力がのぞまれる！

カトリック学校や幼稚園は教会の福音宣教の使命達成のため、むしろ主役であってワキ役ではない。さいきん、仙台で市内カトリック三校の定期戦、青森県と岩手県でそれぞれの地区の幼稚園教職員研修会が行われた。教育の現場で神の国実現のため働く司祭、修道者、信徒、そして協力を惜しまない多くの方々に感謝のおもいでいっぱいである。

現在、教区内の教育施設は短大三校、高校八校、中学七校、小学八校、そして幼稚園は五十五を数える。そのほか信徒の経営するものもいくつかある。これらの学校や幼稚園はいずれも建学の精神をキリストの福音に置くいわばカトリック姉妹校であり、仙台教区にとってかけがえのない福音宣教の拠点になっている。そのいずれもが、これまで長い間、教会のために貢献してきた。おそらく、信徒のうちのかなり多数の人びとが、これらのカトリック学校や幼稚園にかかわって洗礼を受けるに至ったことだろう。それゆえ教区をあげてカトリック学校や幼稚園を理解し評価して、本来の使命達成のため積極的に協力しなければならない。

協力の第一は司祭にも信徒にも、カトリック学校や幼稚園に対する正しい理解である。それがなによりも働く方々への励ましであるが、同時に学校や幼稚園にも使命達成のための正しい姿勢が求められよう。信徒がきわめて少ない布教国日本では、カトリック学校は信徒の信仰教育を第一にすることはできない。信徒が自分の子女を学ばせる時だけ、カトリック学校や幼稚園に関心を持つというのではまだまだ足りないのである。もっと積極的に、信徒の力でもってカトリック学校や幼稚園をよくする方法を考えてみよう。

たとえばカトリック学校や幼稚園が使命をよりよく果たすために、「信仰ぶかい、人間的にもすぐれた、立派な」先生が必要なことはいうまでもない。どこでも、いますぐにでもそういう先生がほしいのである。信徒、とくに男女青年が、カトリック学校や幼稚園の使命をよく理解してその求めに応ずることは、教育における使徒職への召命にほかならない。

人間の教育が福音宣教の本質にかかわることをいまさらくりかえす必要はないだろう。ただ、以上のべた事柄をよく理解して考えてほしい。教区のすべての司祭や修道女、そして信徒が力を合わせて、カトリック学校や幼稚園を盛り立ててほしいと思う。姉妹校同士の話し合いや協力は、そうした願いが具体化する第一歩になるにちがいない。

佐藤司教　世界聖体大会（ルルド）へ

佐藤司教は7月15日から31日まで、ルルドで開かれる第四十二回国際聖体大会に出席される。今年の国際聖体大会は一八八一年にフランス・リール市で第一回大会が行われてからちょうど百年、そのため巡礼地ルルドで全世界百か国からの参加者を集めて盛大にひらかれる。テーマは「新しい世界のために裂き、与えられるパンであるキリスト」。ご聖体に対する信仰を中心に、さらに教会の刷新を促す様々なプログラムが組まれ、日本からも百人以上の代表が参加する。佐藤司教はそのあと、聖地エルサレムを巡礼して帰国される予定。司教を通して私たちに大きな恵みと、旅行の平安、無事を祈りたいものである。

光ケ丘スペルマン病院……産婦人科を開設……

△生命の尊厳を広く世に証しする　東北唯一の　カトリック病院　▽

仙台市東仙台六丁目七ー一光ケ丘スペルマン病院（理事長・佐藤千敬司教、病院長・前田敏行氏）は、昭和30年創設以来数々の変遷をたどってきたが、去る5月1日、内科、小児科の他に念願の産婦人科を開設した。

目的は、産婦人科、特に産科、小児科を中心とした母子の健康管理である。カトリック精神を体現する産婦人科として、妊娠、分娩はもちろん、不妊娠症、家族計画、母乳栄養相談、育児相談にも応じている。

最近は、心身障害児の早期発見、早期治療を問われているが、小児脳神経科を持つ当院にとっては、格好の課題となるであろう。

妊産婦異常などにおいても、母子共に障害なく出産できるよう優秀な医師を配慮し、名古屋の聖霊病院から多年の経験者である産婦人科婦長・シスター小山が特に応援に来て指導相談に当たるなど、暖かい雰囲気の中で、すこやかな赤ちゃんの誕生を祝うようスタッフ一同万全を期して張り切っている。

新しい建物は、鉄筋コンクリート四階建で㈱凡建築設計事務所の設計管理、前田建設工業㈱仙台支店の施行で延一八八六㎡（五四二・三六坪）で総工費五億円を要した。

晴れわたる青空の下　カトリック三校定期戦　〈仙台〉

5月20日、晴れわたる青空の下で、第15回カトリック三校定期戦が行われた。三校とは仙台白百合学園、聖ドミニコ学院、聖ウルスラ学院の三つのカトリック姉妹校のことである。定期戦の目的は、各校の親睦を深めることであるが、生徒達の楽しみの一つに、中学時代の同級生に久し振りに再会できるということがある。そして、間近に迫った宮城県総合体育大会の前哨戦としても貴重である。

開会式は、9時定刻にスポーツセンターで始まった。聖ドミニコ学院のバトントワラーズの先導で、松田聖子の「夏の扉」の音楽にあわせて、各校選手団が満場の拍手の中、堂々の入場行進。開会式終了後、ウルスラ、白百合両校の新体操クラブによる演技披露、三つの会場にわかれ競技が開始された。

その結果、バスケットボール、庭球、卓球、剣道は、仙台白百合学園が優勝。バドミントンは聖ウルスラ学院、バレーボールは聖ドミニコ学院が、それぞれ優勝した。総合では、仙台白百合学園が2年ぶり、10回目の優勝を果たした。

閉会式の後、交換エールを互いに行った。試合は白熱し、一般生徒たちは選手と一体になってボールを目で追いながら、まるで自分達が試合をしているように、一生懸命応援した。

これからもカトリック三校定期戦を通してお互いの親睦を深めていきたいと思う。

（聖ウルスラ学院・高三・富士彰子）

†　ラマール神父逝く　ー勿来教会主任ー

昨年2月から療養生活を続けていたドミニコ会士ラマール神父は、6月1日、カナダ・モントリオールの聖アルベルト修道院で心筋梗塞のため帰天。68歳。

葬儀ミサは、6月9日午後1時から勿来教会で行われた。司式は、佐藤千敬司教を初め15人のドミニコ会士、3人のグァダルペ会司祭による共同ミサで、説教は、同級生の平教会主任グローロ神父が担当、生前の故人の偉徳を賛えた。教会、幼稚園関係、そしてエキュメニカルな立場からプロテスタントの関係者も参列、多数の人々が故人の冥福を祈った。

ラマール神父は、一九一二年10月20日、モントリオール市で銀行家の長男として生まれた。

信仰深い両親の感化を受け、早くから司祭職を夢み、ドミニコ会に入会、一九三六年12月司祭に叙階。一九三九年5月、ピシェ、グローロ両神父と共に来日。語学の勉強の後、青森の弘前教会に赴任した。その後第二次世界大戦が勃発、抑留生活を余儀なくされ、数々の辛酸を味わった。戦後は、外地からの引揚者や戦災者達のため、住宅、衣料、食料の入手に東奔西走し市民に感謝された。

一九六七年頃から心臓を悪くし、病気をくり返し、闘病生活をしながら、白河、勿来教会を司牧してきたが、この度、病いとの戦いを終え、その魂を主のみもとに帰した。

海へ、山へ、夏休みの青少年合宿いろいろ！

もうすぐ夏休み、各県、各地区で、青少年のための夏休みの合宿計画が練られている。内容、目的もいろいろだ。現在決まっている分を紹介しよう。

福島
●浜通り地区（小名浜・勿来・湯本）小・中・高校生、それぞれのグループで8月下旬に、五浦ドミニコの家を会場に行う予定。
●平地区―小学生を対象に平教会を会場に、8月中に3泊4日の合宿を行う予定。

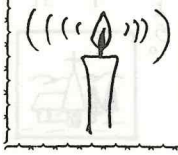
宮城
●宮城県中学生夏期合宿8/4-7. 岩手青年の家において。
●高校生夏期合宿―8/10-13 米川公民館にて
●小学生は各教会単位で、それぞれ計画中。

岩手
●四ツ家・宮古合同海浜学校（小学生）7/30-8/1宮古教会於―テーマ・イエズスにならう
●岩手県カトリック高校生夏期合宿8/10-12・花巻教会―テーマ・身体障害者に対し高校生として何ができるか。

青森
●中学生練成会8/9-11むつ大湊で。
●ヤング・クリスチャン・トレーニング（高校生）8/2-4 弘前大清水老人ホームにて。

1981・年間目標

家庭を通して
キリストの愛をひろげよう
（仙台司教区）



投稿

実子特例法に対する一信徒の考察

東仙台教会　和野邦義

最近、石巻市の婦人科医が他人の生んだ子を実子として養子縁組させた事件から、実子特例法の制定の良否が論じられております。これに関して、信徒の一人として私見を述べさせていただきます。

現在我が国には、普通養子法という貰い親の戸籍には養子の出生（即ち実親）が必ず記載される養子法のみありますが、諸外国には、断続養子法という養子の出生には全く触れない養子法、即ち養子であるが生みの親に関しては全然戸籍に記載しない養子法と、完全養子法と言って、貰い子であるが生みの親の事実は全然記載しないのみならず、養子ではあるが戸籍上は自分達夫婦の実の子であると記載する養子法とがあります。

我が国には現在、先に書いた普通養子法のみがありますが、後者の断続養子法も完全養子法も未だ認められず制定されておりません。実子特例法というのはこの完全養子法とほとんど同じ法律であって、この法律の制定が望まれている次第です。勿論技術的に申し述べるべき部分がありますが、紙面の制限上割愛させていただきます。

最近子捨て・子殺しが時々報道されますが、その原因は、望まない子をみごもった母がその子供との関係を絶ちたいためという場合がほとんどの様であります。勿論、色々な事情で望まれずして生まれる子供でも、我が子である以上その生命を守るために戸籍上の不利（例えば私生児分娩）を背負って生み育てる方も多くおられるし、又、万難を排して出産するものの、育ててゆけない環境のためにやむを得ず養子に出すという方も多いと思います。しかしみながみなそうではなく、逆に、自分と生まれてくる子との関係を絶ちたいと考える母も存在すると思います。現在我が国の優生法は妊娠七か月以後は中絶を許しておりませんので、当然分娩し健全な子供として生まれるのですが、このとき生まれる子との関係を絶ちたい母親は必然子の生存を奪うという事態が発生するのです。この時子供の立場になって考えると、子供は全く何一つ己の生存の権利・希望を主張できないのです。それで私は、このような親から子を守るために、親に戸籍上の親子の関係を絶つことが出来て子を生み養子にすることのできる法律として、完全養子法の制定が必要だと考えるものです。勿論これは子供の生命を守るためであり、又、貰われてからの子供の権利、即ち実子としての権利を得させるためであります。これには種々心配なこともありますが、それは技術的なことであり、諸外国ではその方策も立てられております。

以上述べた論旨からこの養子法の制定を望み、皆様方の建設的な意見と御批判をいただきたいと念願致します。

おらが教区

仙台司教区統計

雑感(二)ー続きー

今回は、事業についてみてみよう。

表3. 教会学校生徒数は漸減傾向。幼稚園から高校まで生徒数は一九七〇年代前半がピークでその後はこれも漸減。特に幼稚園では園児不足から閉園を迫られる所も現われた。短大は不安なく成長しているようである。

厚生省の管轄の下にある社会福祉事業は着実に根を下ろしているようだ。

さて、先月号の表1.と2.を参照していただきたいのだが、その表によると、戦後から一九六〇～六五年頃まで教勢の上昇期、その後停滞・下降期、一九七五・六年頃を最底としてそれから何となく上向いているという波が感じられる。それに表3.を重ねてみると、停滞・下降期にも教育事業がどんどん成長していることがわかる。経済成長に伴い生活が安定することによって、人が個人的に宗教を求める機運が薄れ(信者・志願者・求道者・洗礼の減少)、一般的には〃まあ、うちの子は名のある幼稚園・学校にでも通わせておくか〃という風潮が一方にあり、教会側(司祭も信徒も)は、〃人が集まらないし、宗教本来の活動は下火でやっても芽が出ないし、まあ、幼稚園・学校の方でヨロシクやってもらおう〃とでもいうような傾きがなかっただろうか。それとも、〃これから教会活動は幼稚園・学校を通してということに力を入れるべきだ〃という積極性があったのだろうか。ともかく、その幼稚園・学校の生徒は一九七六年以降漸減している。反面、表1.と2.でその時期から何らか上向きの線が見えるということがもし正しいとすれば、その時までの表3.の成果が関係しているのだろうか。あるいは一般社会が、平穏な(?)安定生活ができるようになって、更に「本物」を求めようという気風が兆し始めたからだろうか。

先頃また、日本人の宗教意識という全国世論調査が発表された(昭和五十六年五月五日付朝日新聞)。その結果はそれまでの調査と大概同じという感があったが、解説をすこし抜き書きしてみよう。『無宗教者は三十代までの若い層では七割を超え、二十代前半では実に八割。…この「無宗教」者層の半数以上は、「人間や自然を超えた大きなものの存在を感じる」とし、「人間の魂は死後も残る」と答えている。…こうして浮き彫りにされた「無宗教」者層の大半には、合理性に徹した無宗教者の意識はほとんど見られない。そこには、既成教団では吸収しきれない、習俗に近い宗教的心情がみえてくる。これはむしろ、「無宗派」層と呼ぶべきかも知れない。一方、「信仰する宗教がある」と答えたのは…キリスト教系は全体の二%だが、若い層が比較的多い。』

カトリック教会は当然既成教団に含まれる。宗教的心情はもっているが既成教団離れが進んでいるといわれる右のような風潮の中にあって、「本物」を知っていると自認する我々は何をなすべきなのだろう。戦後の急増期が過ぎ、その後の停滞期を経た今、教会は〃イ

表 3.

注：上段は園児・生徒数，括弧内は事業数
※印の数字は、当時幼稚園と保育園が区別されなかったので正確なものとはいえない。

年度	教会学校生徒	幼稚園	小学校	中学校	高校	短大	社会福祉事業数
1950	1553	1793 (17)	985 (4)	1650 (5)	1114 (3)	—	8
55	3130	5002 (38)※	1136 (5)	1009 (5)	2125 (5)	50 (1)	9※
60	2621	5899 (42)※	1732 (7)	1603 (9)	3407 (7)	140 (1)	10※
65	1839	9564 (51)※	2132 (8)	1758 (9)	6134 (8)	296 (2)	12※
70	2165	8508 (55)	2077 (8)	1303 (8)	6256 (8)	911 (3)	20
75	2053	10203 (56)	2132 (8)	1251 (8)	6133 (8)	1102 (3)	20
76	1557	10059 (56)	2148 (8)	1263 (7)	6068 (8)	1124 (3)	21
77	1662	10034 (55)	2092 (8)	1254 (7)	5870 (8)	1155 (3)	21
78	1683	9748 (55)	1863 (8)	1214 (7)	5818 (8)	1147 (3)	21
79	1689	9607 (55)	2032 (8)	1159 (7)	5695 (8)	1162 (3)	21
80	1639	9079 (54)	1932 (8)	1109 (7)	5845 (8)	1154 (3)	21

スラエルの残りのもの〃であることを体験したということならそれでいい。ただ、その残りのもの＝少数派＝のもつ真正な気魄といったものを、地の塩・世の光として顕すことが求められるだろう。そのためにまず出来ること・しなくてはいけないこととして、自分自身について・家庭について・教会について・学校や職場について・地域や社会・政治や国際的な事柄について、〃これでいいのかな〃と感じることがあるかないかを調べ、その感じることを考えとしてまとめてゆく作業がある。

また勝手なことを書いた。批判・意見・（統計についての）感想・その他何でも、お待ちします。（完）　（平賀徹夫）

どくしゃのぺえじ

「遠きながめは・・・」
－黙想会に参加して－

武田　洋子（元寺小路）

私は、真暗なシーンとした部屋に入った。すでにミサは始まっている。

隣の人の顔も見えない。このようなミサに与るのは初めての事で少々驚いた。

しかし、暫くすると不思議に気持ちはミサの流れの中に入り、安らかな気分にさせられていく。暗いのでなおのこと、ローソクの光が大切に感じられ、御聖体を隣の人に渡す手にも、「お大切に」という言葉が表現されている。

今回の黙想のテーマは、「遠きながめは楽しきかな」という旅人が口にするような題である。人生という旅の途中、種々な人間、事どもに出会う。この出会いの中で、一生懸命して、ある極限状態に陥った時、人は「向こうから見えてくるものがある。」と押田神父様は、おっしゃる。目の前に神の手が・・・。

私の今までの短い旅は、あまりに無味乾燥としていて、向こうからのながめなど気づかずに過ごしてきた。せめて、これからの旅に期待を寄せようと思う次第である。

＜お願い＞ 読者の頁を盛り上げるため、詩、俳句、短歌、信仰体験など、御投稿をお待ちしています。締切日、毎月十日。

おしらせ ＊＊＊

◎小野忠亮神父様の住所が次のように変更しました。

030 青森市浦町字奥野四四八
藤の園マリア院気付

◎軽費老人ホーム〃あけの星荘〃の住所と、電話番号は次のとおりです。

983 仙台市安養寺2－24－1
電話番号 022－97－1359

（訂正）　5月号3頁でウラール・ニボン神父は、ラウール・ニヴォン（Raul Nivon）の間違いでした。

6月号2頁広報担当者名の中、木戸清吉氏の所属教会は松木町ではなく、野田町教会です。以上二点を訂正し、お詫びいたします。

春秋

先日来日したポーランド自主労組「連帯」のワレサ委員長は、ある雑誌で次のように語っていた。

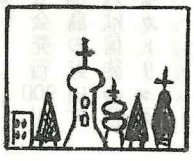
「自分が本当にリーダーかどうか、私にはわからない。わかっているのはただ、私が匂いをかぎつけ、情況を感じ取り、群衆が沈黙している時、沈黙の中で言っていることを理解できるということだけだ。そして私は声に出して、的確な言葉でそれを言い表わすのだ。」（文芸春秋六月号）

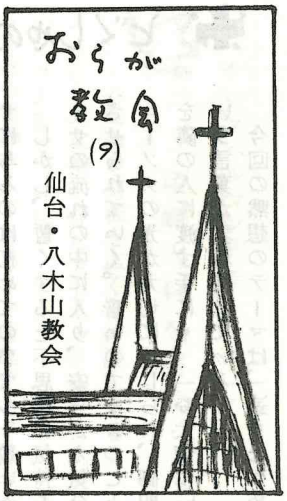
沈黙の語りかけ、が理解できると断言するワレサ委員長。「もし民衆のためになるなら、それは良いことだ。民衆のためにならないのなら、それは悪いことだ」と語る彼の背後にポーランドの民衆一人一人が見えてくるのは筆者一人ではありますまい。

「連帯」の中に語る言葉を持った時、沈黙していた民衆は、大国の圧力に抵抗し得る自分に気づいたのではなかろうか。

ワレサ委員長は、「われわれの教会は常に闘争のシンボルだった。つまり、圧制者に決して屈服しない唯一の存在だった」と言葉を続ける。これは、故ビシンスキー枢機卿がポーランドの自由と抵抗の象徴だったように、ポーランドの教会が民衆の沈黙の語りかけを理解し、的確な言葉でそれを表現し続けたことを証しするものであろう。

（狼河原）





仙台市の南西に位置する新興住宅地として開発された八木山のほぼ中央に、約10年程前我が八木山カトリック教会はケベック宣教会によって創設されました。(初代主任神父はトランベル神父。現在はクルノワイエ神父)。

創設当初は、信徒数は大変少なかったが、10年経過し、信徒数も百名を越し、司祭・信徒一同、地域の事情に適した、活きた教会づくりに頑張っております。以下、簡単に信徒活動の一端を紹介してみましょう。

教会の一年間の活動方針は、復活祭ミサ後の信徒会定例総会で決められます。その活動の詳細な検討は再度毎月開かれる役員会で行われ、実行の役割分担が決められます。

大祝日の御ミサは勿論、主日の御ミサが、生きたものとなり、参列した信徒の一人一人が、良かったと感じられる御ミサにしようという努力が、典礼委員会でなされています。この典礼委員会の発案・役員会の検討でいくつかの工夫がされてきました。主日の御ミサは朝の九時半に一度だけです。早朝ないしは夕方の御ミサを付加することが話題にはなりますが、多くの信徒が一堂に会することの意義を考慮し、主日の御ミサは一度の原則をとっております。御ミサ後、誰とは言わずお茶をわかし、話に花を咲かせます。

小教区内に東北大学の外国人研究者用の宿舎があるために、外国人のお客さんがよく来られ、共通の信仰を持った世界の宗教という強い確信が得られます。

子供の信仰教育に日曜学校の果たす役割は重大であり、信徒以外の子も生徒として受け入れ、福音宣教も行われています。子供を通して、親がカトリックに関心を示し、祝日等には出席する父兄が何人かおります。

信徒の信仰教育として毎月一回、御ミサ後勉強会が行われています。テーマは、我々信徒が相談し合って決め、年間を通じて同一テーマで勉強してきております。

福祉活動の一環として、地域の福祉施設の福寿園、和風園への物心両面の援助がなされつつあります。家庭における信仰教育としては、マリッジ・エンカウンター経験者を中心にいくつかの努力がなされております。

まだ紹介できなかった活動もたくさんあります。活動のほとんどが、試行錯誤の中から生まれたもので、目的は一つ、御旨の実行、であります。

最後に、活動の多くは、オタワ愛徳修道女会八木山修道院のシスター方の援助のもとに行われてきたことを付加し、10年経過した我々の教会が真の教会になるために、主任司祭、信徒一同、大いに頑張っていることを報告致します。　(新村信雄記)

案内　読書

「この子とともに生きる」
高木　幸著　女子パウロ会発行900円

著者高木幸さんは福島の野田町教会の信者で、御主人は信徒会長を勤めるなど、熱心なカトリック信者一家です。

この本は、障害者の母として生き抜いた二十余年を、淡々と、しかもユーモラスに綴った母と子の成長の記録です。ミサなどで日常接する幸さんは、小柄で柔和な、どこにでもいるおばあさんという感じです。このような人が心貧しい人というのでしょうか。

彼女のどこに火のような忍耐の炎があるのかわかりません。しかし、秘められた祈りと神への感謝の心は、幸さんの生活全体からにじみ出ていることがわかります。

信者、未信者にかかわらず、広く一般におすすめしたい一冊です。(野田町教会　木戸清吉)

【編集後記】　●教皇様そ撃のニュースは日本中を一瞬慄然とさせた。雪の吹きすさぶ中、平和を訴える教皇様の姿を忘れられない人は多かったろう●もう一人の平和の使者マザー・テレサは「人間家族にとって最も美しい恵みは子どもです」と日本人の心に呼びかけた●真理を叫ぶ声にごもっともと言いながら今の日本は？？？●先に日本司教団が発表した平和実践の声明に耳を傾けよう。

仙台司教区事務所だより45号
昭和五十六年七月一日発行
発行所　仙台司教区事務所
〒980 仙台市本町一丁目2番12号　TEL 0222 22 7371